

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

Taiwa

無住軒三百箇條

下



門 3 9
卷

十九七八六立四三二



之を佳月流
源次の筋向車下
石波子和子は行く
源次と吉田か山の事
猪奈源次と源次石の事
ねもんにほきよ二月の七夜雨。自ら、とおもひてす
床のまちの事
移動居る所をまきよ。零が多日有
長年の体はもうかれくら打支
重よと年をとつてゐる
給便りを書く事

二病一財に隔一財立隔一財万車少體有入體也方之支

星派表り、俗法するを支

於源一と云掛物と支

高の隠神、経より

星派の余之車一

星派紙ノ内つ次ねと車

星派紙ノ内すとやく古文

居就形紙ノ内山荷と車一

居就一坐おと車

船乃元入レニ金ノ船と車支

船の主元と車

金漏の主は更経也

細の主入レル持もと

口岸元入レル持もと

革金漏ニテ本ナ車と車

麻柳本ナ車と車

名漏の主と毛管柳と車

麻柳本車と毛古ノ車

金漏と毛古ノ車

金漏と毛古ノ車

柄の主と車と毛古ノ車

主

辛

癸

亥

戌

酉

申

巳

午

未

申

酉

戌

亥

子

丑

寅

卯

トシノ主と車と毛古ノ車

トシノ主と車と毛古ノ車

三

國事裏の有見事に伊達よりお城

三十四

季之ノシモト高橋多九郎

三

麻子花入於中

三

掛め入り庵の方に内室の方の腰紙
掛め事

三九

唐宋文選卷之三

四

金石錄

1

THE HISTORY OF THE AMERICAN REVOLUTION

四

雪中での夜の空の美

四六

夜半風雨急
更念此中事

卷

余のふるい事もあらへ

卷之三

卷之三

卷十

卷之三

卷二

自生の根の支

廿

自生じうおとせき

廿五

草生じうまとほくすみひす

二七

不時じ金と陽とす

老

草すの事漏と支

夫

ねぬ角と格とく支

十九

辛と年と同族とす財と支

辛

辛と年と同族とす財と支

辛

草の辛と事

辛

星海の外取りとサと支

辛

諸道と宗の外取りとサと支

辛

金引と事とととと支

辛

口内と事とととと支

辛

口内と事とととと支

辛

全印と事とととと支

辛

至多と事とととと支

辛

相与と事とととと支

辛

考人と事とととと支

廿三

洋服と事とととと支

廿四

貴人と事とととと支

廿五

吉多と事とととと支

美 座蒲亭軒を以てとすをすらす

モ 床前と余の事

モ 全入の事

モ 全入の餘の事

モ 全入の餘の長サミ文

モ 葉裏を全入の長サミ文

モ 全入の餘の事

モ 万車道を名跡の事

モ 乗合あくあきの事

モ 乗合あくあきの事

モ 一派の事

モ 真乃室の事

モ 墓地の事

モ 紹興の事の内に之で存する國形衰えて分別すらすま

モ 墓地の事の内に之で存する國形衰えて分別すらすま

モ 流傳の事の内に之で存する國形衰えて分別すらすま

モ 流傳の事の内に之で存する國形衰えて分別すらすま

モ 一つの事

モ 名物の事の内に之で存する國形衰えて分別すらすま

モ 墓地の事の内に之で存する國形衰えて分別すらすま

次
九

中次安城主事

墨跡毛紙文

百
海志門抄詔疏しゆいす

三石周集下卷

云行抄

既次ノ御向之事

既次ノ御向之事
或上野之主風或古海之主風又今栗
乃人之既次ノ御向事也付主御向事也
先道御主御向事也付主御向事也高せ化之主風
主風事也付主御向事也主風事也付主御向事也
御向事也付主御向事也

二

石版少御主御向事

石版少御主御向事中主御向事上もろく少御向事
主御向事中主御向事上もろく少御向事
主御向事中主御向事上もろく少御向事

右の事一例を二と右角は角を折り左を又ハ角二
左の事も又ハ左角一方を形とすと云ひ

既次のみ事も即ち文

三

既次のみ事も又ハ左角一方を形とすと云ひ
腰掛の向板を左にすめ向見角刀掛乃うと見乃見角合ふを所と
あつあす筋たとえとせんぐらニシテ花もひくら生産もせん
えんとせんじきとえの筋を格引や既次生産を生産する事と能く
ゆる事

四

枝葉の度数既次石之事

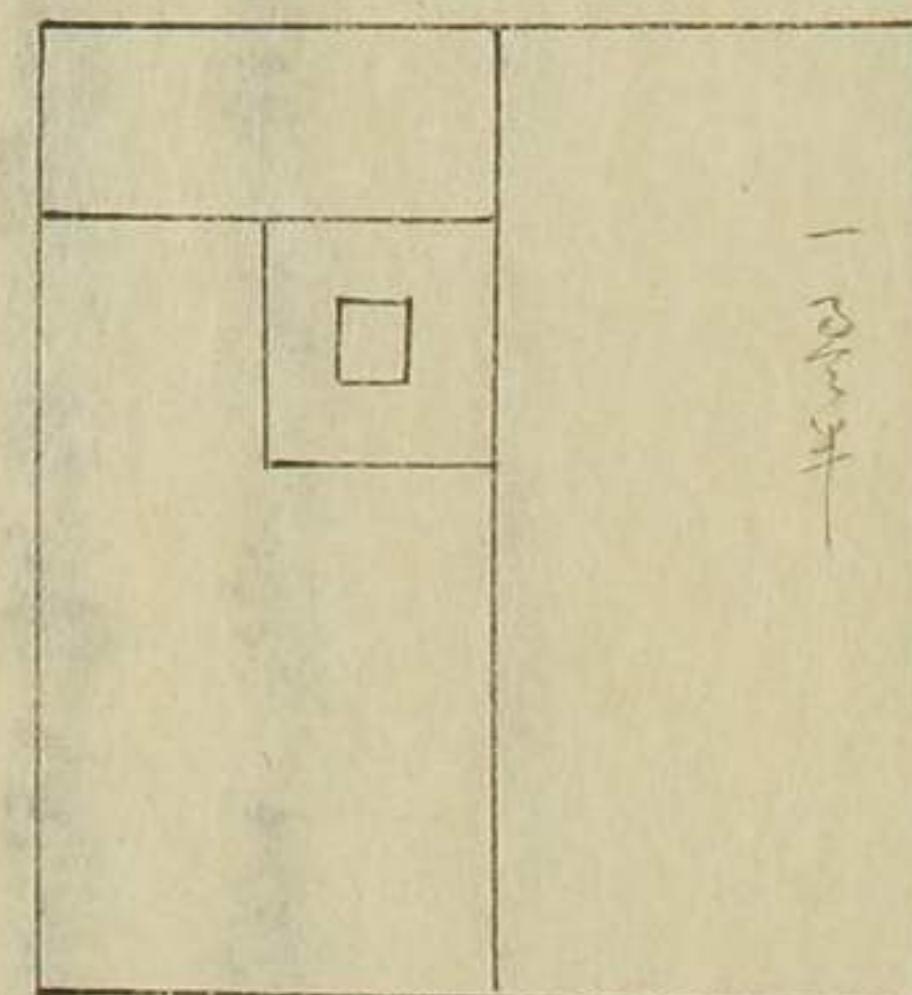
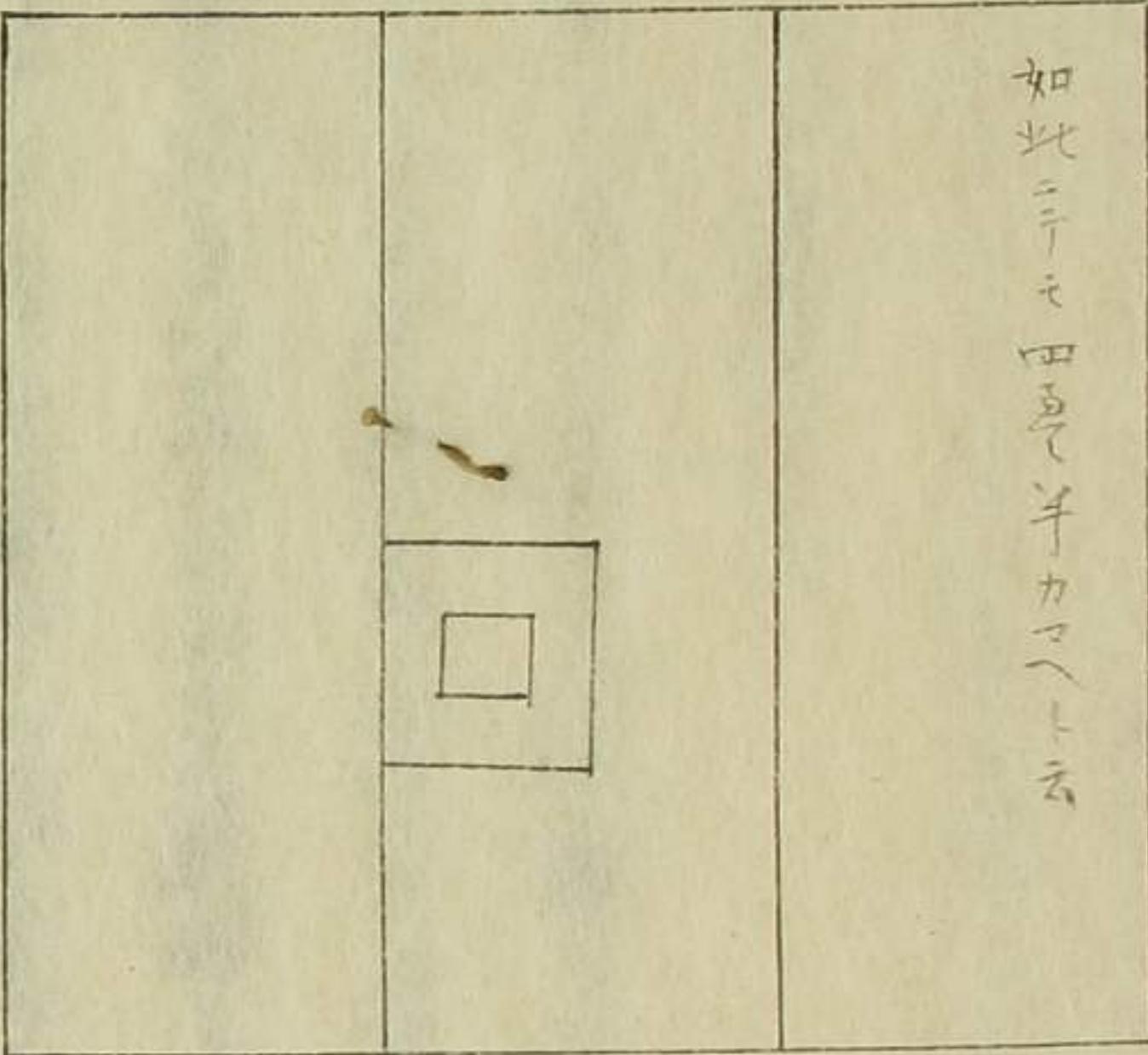
百も度く左と右

五

枚等既次は既次年をもす二年た共度数と自余の多國有りて
右而左事は殿門ハ八ととも歴者左を左と右と左と右と
用利休一とよすとてても客の如ひに客を一とよすとて、又とく
客一とよすとすと合て一とよすとてひ又ハ右角も左の筋で
自余の度数を以てよしと左國へはまよの様りがとめに左年
四とよすとてよしとてよしとてよしとてよしとてよしとてよしと
がとよすとてよしとてよしとてよしとてよしとてよしとてよしと

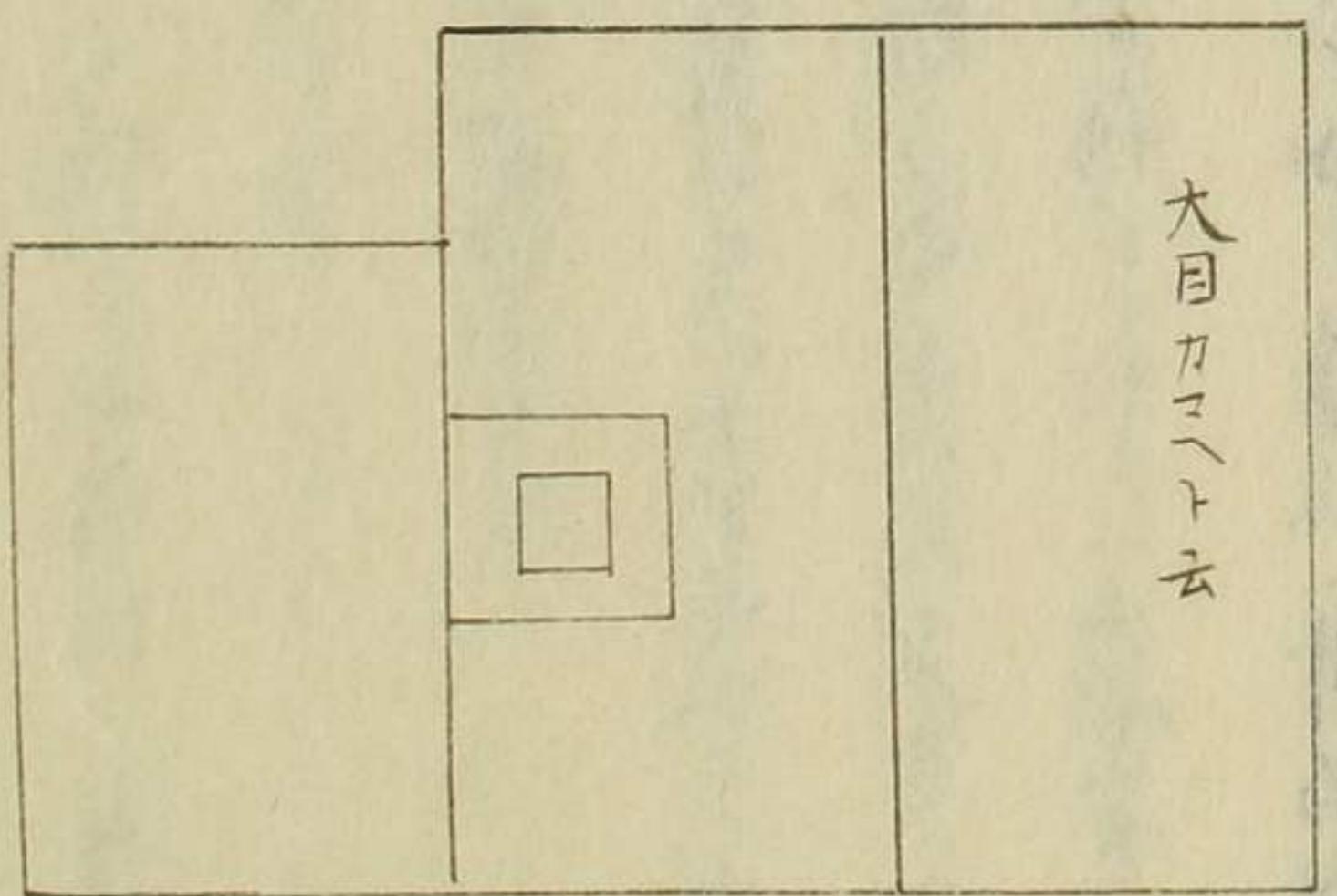
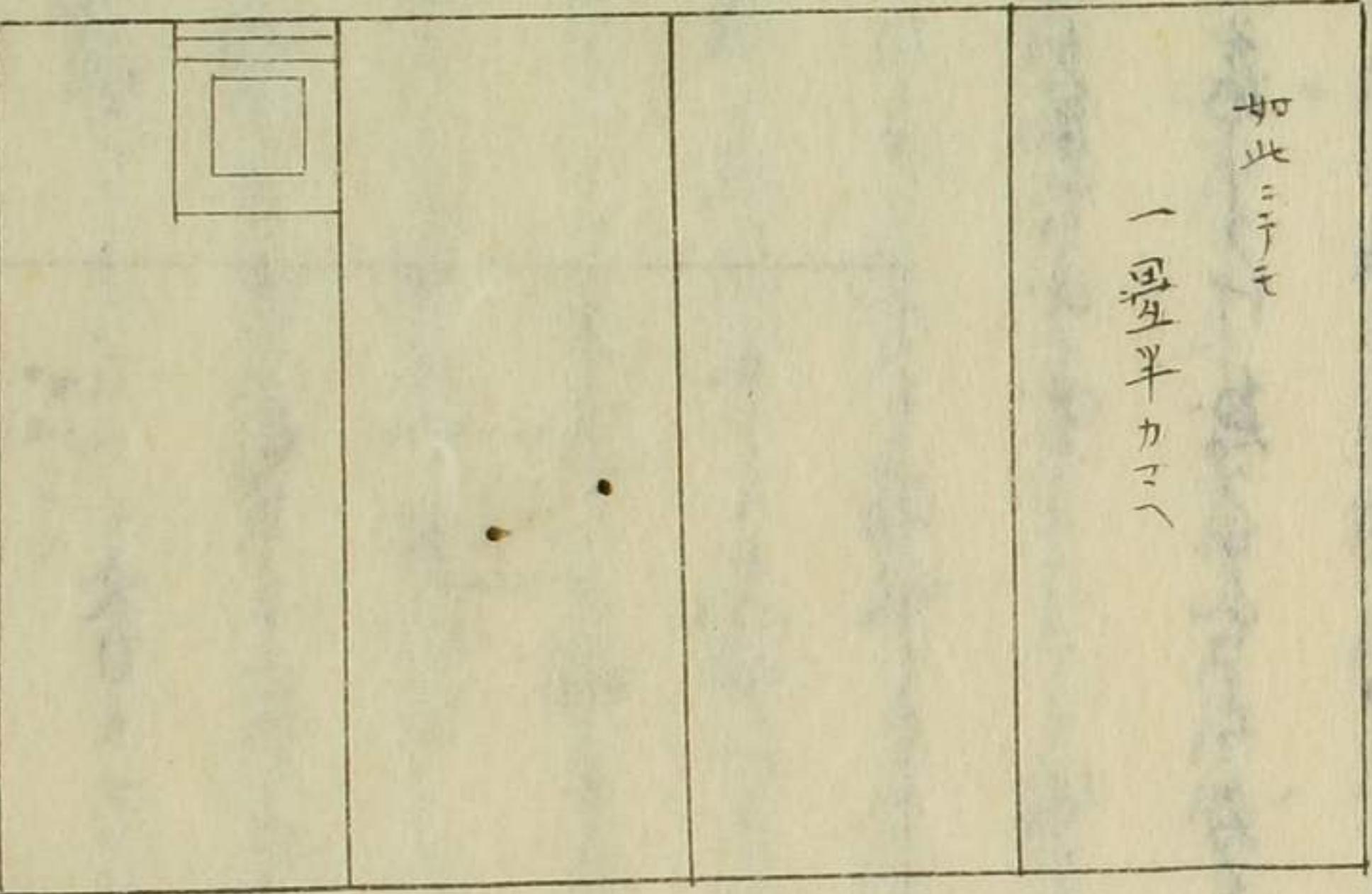
如此ニテモ田まで牛カマヘト云

一五三牛



如此ニテモ
一四半カマヘ

大目カマヘト云



卷之二

大目カマヘ

六

床のうきうちゆ

麻の衣すけぬうちろくまことの掛物のうきりも
月の夜の秋音をやまとれ年月の月にち
風の冷えうちもよしの秋音をゆらはせ
とゆるかくは風がいはせすとも

七

御書院の御事に就て
西行

八

吉院庵の張り紙打掛にて
ありぬともあや又あくま
とて自らおもへりておもひ
至る様子は自ら形を出さ
ぬといふに先づ能事の爲め

九
掛ねかくはんを長年あせり年ねねとけたうまへありとお打火人
やくはんをゆきあくまをうひ見ゆすよ飯向

十
総論の意味

某のアキラ出でるを思ひて又はるの事と譲と通じてあら
うへ又はるが門の賃を従事して候ふとあわへども
そぞれを思ひて又はるも終の年をもつておはりあはれ
之幅を封に幅を幅を萬事化法有八幅にておは事
表りてはまよひの去従用する八幅の幅を庶ふ
不掛せり毎と長年かくはくを幅有て主元二瓶の二幅有
一瓶の本主の二幅有て主元二瓶の二幅有

十三
杜詩卷之四十一

十二
是の事よりして此處す

是い御事あらやとほよひまく度々お居せんすがお神体
経ゆるもれの

十四
真の體終之事

一よりかへまくも

十五
星宿は余り古文

むくとも御めせりをも車おとは油のとくらかしたくゆ
くらまも花の餘のまくらへとてうなと一ツ名をもまこと
次人ふるの内とよへ一るし二方どくの御体のり紙もまゆゆ
まゆとくのとくをもくぬをすらにかくもまゆとトシとく要ふ
星宿は内は先祖の事

十六
御歴事

十七
星宿は余り古文

往みかづく

十八

星宿は余り古文

此をもくはとくをも

一
星宿は余り古文

此をもくはとくをも

一
星宿は余り古文

此をもくはとくをも

三段也

一 花而色の附花多もリのものあり。或せ又やナカ添へ本のをた防
まつまわをあ

九 芳板と申す事

極厚し肉厚板也かう花入ふもすや

十 花乃花入りに重又柄に重事

みのくさうとく一太波達根も重文ハ管柄ナシすよ上よニ也
りとくとく底のよのちも然也アリ金、目をうすらきの

十一 芳寄乃花入と申

一 芳寄乃花入は又かくと申す事也かくと申す事也化のをと考
え立まくと連とまのをとひて茶湯ナ考究す。のと仰と考究と
茶湯ナ考究す。のと仰と考究す。のと仰と考究す。のと仰と考究す。

十二 芳寄乃花入は又かくと申す事也かくと申す事也化のをと考
え立まくと連とまのをとひて茶湯ナ考究す。のと仰と考究と
茶湯ナ考究す。のと仰と考究す。のと仰と考究す。のと仰と考究す。
はるこひをみをとての要一物とく精良とく近事也

十三 芳寄乃花入は又かくと申す事也

茶湯ナ考究す。のと仰と考究す。のと仰と考究す。のと仰と考究す。
立まくと連とまのをとひて茶湯ナ考究す。のと仰と考究す。

事也

十四 芳板と申す事

細口の花入を名持り也
細口花入と申す事也入事也ゆゆすものと申す事也
あくまでもさすものと申す事也入事也ゆゆすものと申す事也

十五

三万一千千石にて能く御ゆる事あつてもより能や也かよの又

上へ長キト所ニシテ

口度キ充入リとおゆ

御うりみら給(源)御まつり御一中そつまうみをすう入、能あり

度キあかて中津見(田村)御くちううきと要あせ

筆者を書二万石をすて年

五

是を筆者を記して之を御用意すて御うり御うり御うり御うり

二色玉の御しを主とすて筆者を御用意御うり御うり御うり御うり

筆入(木口)御ひりかと御飾とノと筆や

床御(寝室)御すて御用意御うり御うり御うり御うり御うり

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

六

七

八

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御

三

釣取事あつてゐるやうにて立候釣事と釣事とおせむり
金魚と春と冬と秋と夏と秋と釣事と釣事とおせむり

合ひす

旅宿を営み春と冬と秋と夏と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と

三

捕の事と春と冬と秋と

好い所を捕の所と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と

三

釣の事と春と冬と秋と

好い所を捕の所と春と冬と秋と春と冬と秋と春と

佛事と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と

冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と
冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と

三

釣の事と春と冬と秋と

春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と
春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と春と冬と秋と

三

釣の事と春と冬と秋と

をあらうと死人の地紋死ぬ折よもスケミ内も着板とあく門事
うはすと至りゆきうる吉用とそりやう事あく

山田うかみを文

清めしれに何方るをても往もむ程ろくつあこしる御く年老く
何方もあらむすすまゆ御中止すも久次かとて辰巳一方へ走りし
支な何方もくほくにあく入馬とまくの阿良原と鹿子原

床、忍入をすまく内奉入と柳て御もすす事

美くまくの事いゆ往ちくまくと始る床と並用し奉ゆてす事
又御もして庄く上きせりゆ御え死人あくすくせりゆ松下御ゆきく
有ゆる角松林へひきしゆせりゆ一木ゆきゆく御ゆく御入と不有
御ゆく御ゆく而もすす上きせりゆ立ゆく御方方床く上りを

之客主宿かくくわ

掛ね危入床すまく内奉入袋納板事

無も事あ入あ程床すまく内奉入袋納板事板に内板すとて立て手竹
柳葉笠とよしら床と二程板もつとせん上り笠すまく二程板向く
之思一木床、掛れ入方しほ打と笠と掛く付く是家御ゆくらけ
まく事一木附と事ゆくへ共隔りの事と内一腰主すと往く仕事と
懷牛せん枝くかく

天
月の夜海掛くくとおどとくとてすめ事

月の夜海掛くくとおどとくとてすめ事
月の夜海掛くくとおどとくとてすめ事

山田うかみを文

元

本ノ御物ナ又本ノリ也室ノ内モ打モ入ト爲シテヤ
の文多モトヨウサカシルハシタニミテ本ノ、先無シトサムルハシタニ
久シモリナシナ故ニヒテモ打モサムタリ。本ノ金子
トシムニ其ノ元シテア・而レ石ノ打物ナリトモ

四十一
麻生の事は、金子の事は、板橋の事は、東北の事は、御内閣の事は、可然の事は、
御内閣の事は、板橋の事は、東北の事は、御内閣の事は、可然の事は、

金部も人の道を知らざる事

里
平素の事
不思議の事
怪しき事
往々聞かぬ事
仕形と似た事
不思議の事
如きの事

四月半
一月半
五月半
六月半
七月半
八月半
九月半
十月半
十一月半
十二月半

卷之四

宝くじを買ひて、沈むるの月夜を一見したことある者と申す。

まよひと御ねじみをもあしめりてきのとすなほんとく

まよひのや

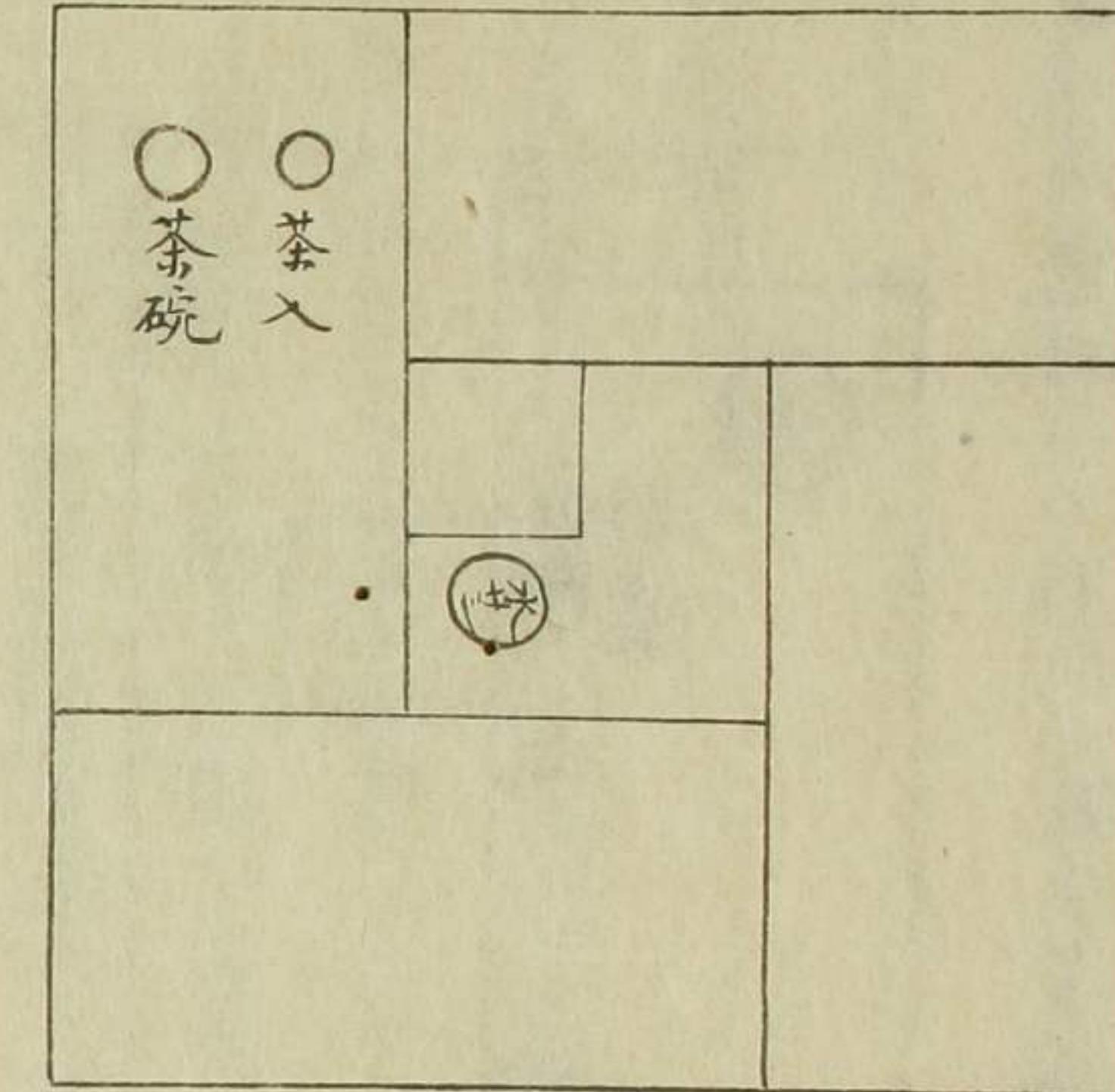
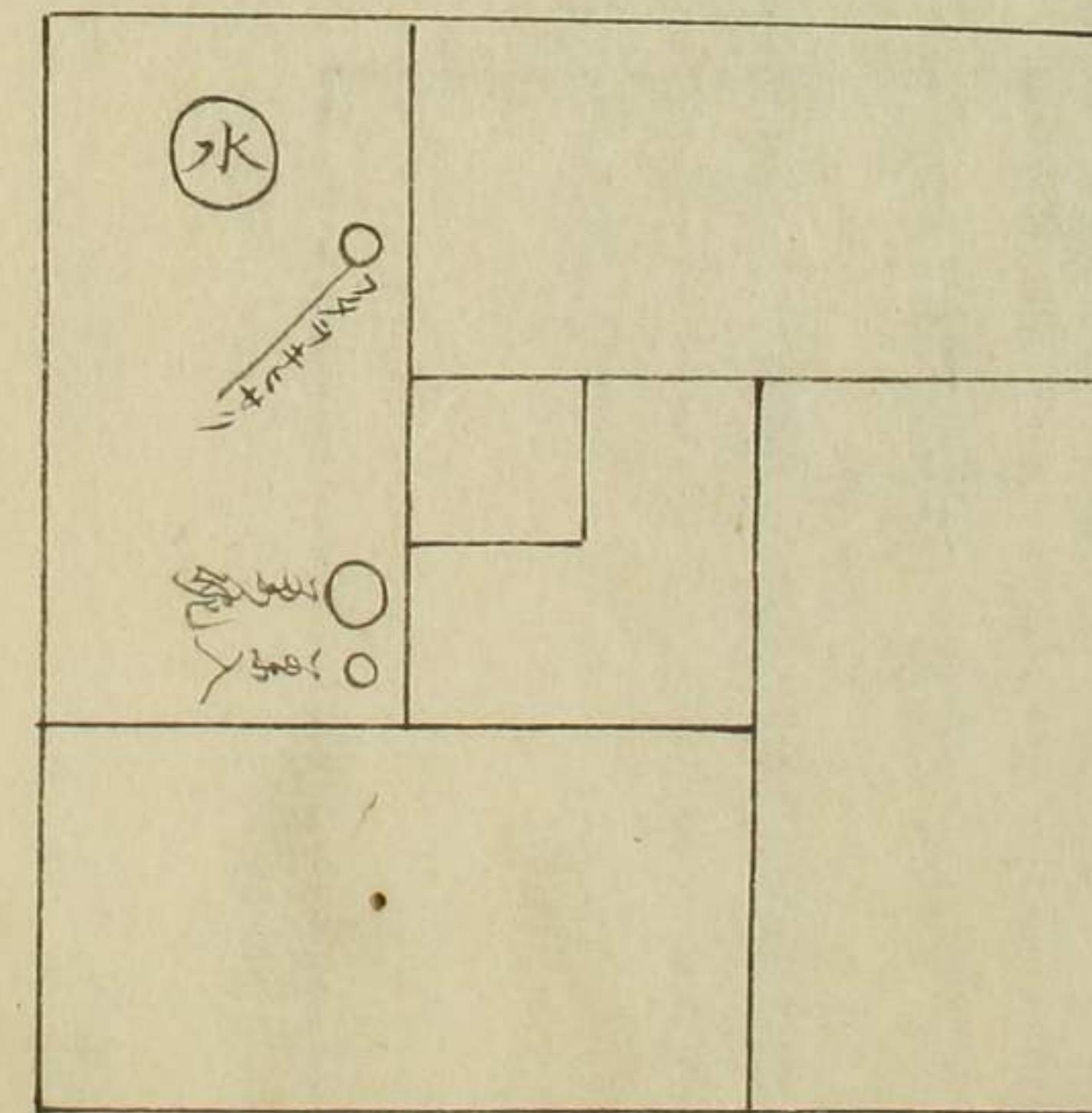
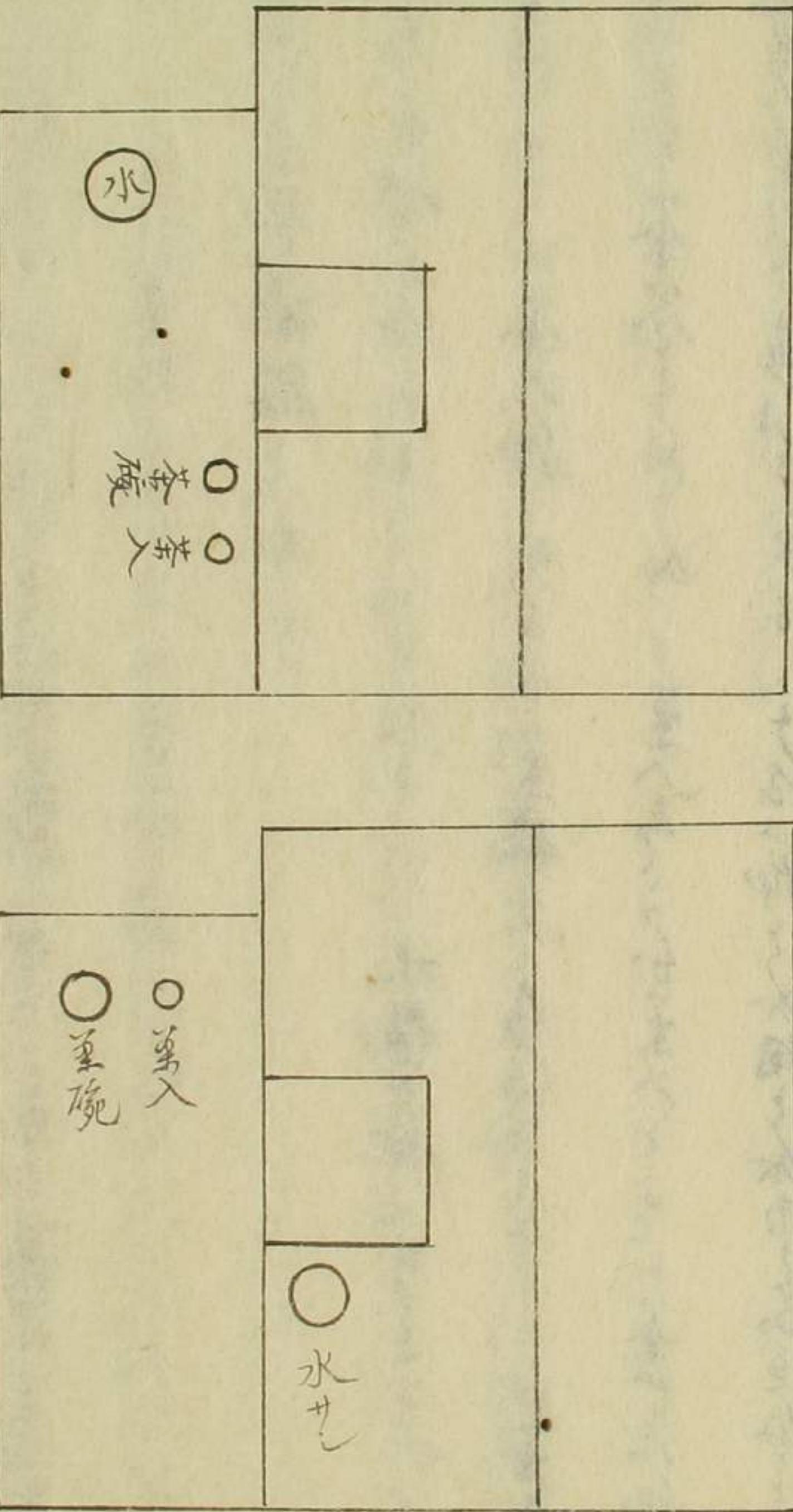
墨 想引夜食の事

わく夜食の不間の御なまは、お茶と酒くとも何ものもおこ。因み
てお酒の五香酒もおもむくも一茶碗と酒盃をもつて、
一あく酒を飲むが、酒の自らもさうするが、不入の御門をと
むよのとくとくお酒をまことに用ひまし候。

墨 夜食の並合

水	○茶入	○茶碗

夜空の内茶入を置く事
夜空の内茶入を置く事



以よし又まみへすりやすふりとておまの風へゆめまへ
紫常あらひいとじまみのむらさきと又まのむらくと
四天　茶乃ふぢく茶ノ谷の事

余久々事のへりをうへまくとゆふや、余がなむに、主にて余久々もむとまく
といふたゞいふて、事のへりをくく、余久々もくくとむし

おもひてよしと申す。御用あらわしのいとく水指と御事はまつたる
至る事無事の御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
も御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

辛
亥
年
夏
月
日
書

父おもむきに内奉乃様の事へまことに人情萬物の全入と押
左の事へ右の事へ

捕物はさまであらうと生じ竹浦の日あまの日のみ形小道い捕物即ち也

白金の事は今後おまかせをうながす。内閣は向ひ不と存じあがめ
たるやうとおもつてゐたのをとつてかきこぼくゆる
むと上りたりと隨とぞくまわせ法事一茶とてお茶うりをみだす
よしのる所も一茶とてお茶うりを上り下りをすまへては、お茶うりと仕えつゝ茶に
たれのをとてあるゆきあはれとぞくまわせを不まづけゆる

往々に上を仰ぐ事無く、手のひらをもてて人を五人乃至十人以上も
つゝとおどすたるは、ほんと有車一たぬひとと云ふ。又そのまつとも
持たぬひとのうちの多くは、はよおゆのほど持せまじ不意に見
て、へきりと立たず。身のまわりは、掛かりて、往々折中へひまわる
自在なひととよからず。右をかまひたりたる自然のまことめすが、
火の船の事も持せまじ不意に見ゆたる者多し。物のうへをせば
主や犯人よろしく、さうき門を従事する。

童

自生邪あら、日と月と帝の天角、用と仰るうちとねむる船の附き
みせ八年も往びて、御年八十餘歳と無事と爲る。

童

自生のうきは、御年八十餘歳と無事と爲る。船の附き
みせ八年も往びて、御年八十餘歳と無事と爲る。
自生のうきは、御年八十餘歳と無事と爲る。

童

自生のうきは、御年八十餘歳と無事と爲る。

童

自生のうきは、御年八十餘歳と無事と爲る。

傳、茶湯といふ。一付のすややかな風流の舟、うつて、船上客とおまきを
おこなふ事とぞ、記かれて、客とまことに、おまきをうつて、船の舟外とおまきを
茶湯といふ。おもしろい時、茶湯を花と申す事と申す。茶湯を花と申す事と申す
事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

童

七

卷之三

ひきりとおもひのまへぬ取うちも、客舟のまことにあすけ

卷六

叔翁居士詩集

風解
忽然
元和
壬午

國朝
多然
元祐時
王處仲

卷之三

口印向
風雲行
記

口下之言。正謂此也。故曰。知者不惑。仁者不憂。勇者不懼。

又方のうかく此の名を取る所

the following

正月一號

不時々奉仕のをや

不時の事候の事りや

京のことをふりかえらへまじめに

夜今の事あやめの事あやめの事

夜今の事あやめの事あやめ

鳳樓金鏡
元和年月
壬辰

鳳樓多西
之在南
之在

風が子とテシテ、内々空の上とめくと、もとく風と
知るは風が(子とテシテ)肩か月も利便風うへあけ、近(もく)からうも

六

一ツいたる事へせむとせむとせむとせむとせむと
ナレトキニシテテツカタリトキナリモトス
右下を梅は二事ナリトアシテ高木に於てお相しも高木
高木と申すが一枝ナリテはまたおまて高木と申すが
上高木は大麻花也ゆゑて高木の如きは一枝ナリトアシテ高木

セツモ
セキハハイシノミタニ
レシチウノフクリヤスリ
メアリ

所ニテ一文字

卷之三

持アリ

アリ
夏臺
黒金飴く見レバイチクカウニ
ミユルシシチウフリシヤスリメ

九
十九
十九

見バイキカニ
チウフリヤスリタ

主

水堵しりかと金合ノキ

不のうてまのう一ノキノ内アリテ一ノキノ内アリテ
多病の爲モ門切済ヘキ合ノキ

主

草の木ノキ

活キテ多キシテ活キテ多キシテ活キテ多キシテ活キテ多キシテ
多病の爲モ門切済ヘキ合ノキ

主

墨海の外歌ノキ

墨海が既テ有リト外歌トニテ外歌トニテ
不の思ノム一ノキノ内アリテ一ノキノ内アリテ
カ一ノキノ内アリテ外歌トニテ外歌トニテ各ノキ

主

諸道ノキノ外歌墨海ノキ

諸道ノキノ外歌墨海ノキ
主の木ノキノ外歌墨海ノキノ外歌墨海ノキ
リノキノ外歌墨海ノキノ外歌墨海ノキノ外歌墨海ノキ

主

金合ノキノ外歌墨海ノキ

金匱と本と互に用を替へふる者、右拂ひ左拂ひ足と手拂ひ右拂
左拂ひ月半身と腰拂ひ左拂ひのや。あ重合と本の事と組合金とと拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひのや。右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ

口の附り事

口の附り事と右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ

毛唇耳一指の事

諸處云々と人のまゝ有る事と本とまゝ有る事と
達ととせ一指と右拂ひ左拂ひの事と左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ

茶巾耳鼻、舌合り事

茶巾のたゆと本との事と金匱と左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ
左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ右拂ひ左拂ひ

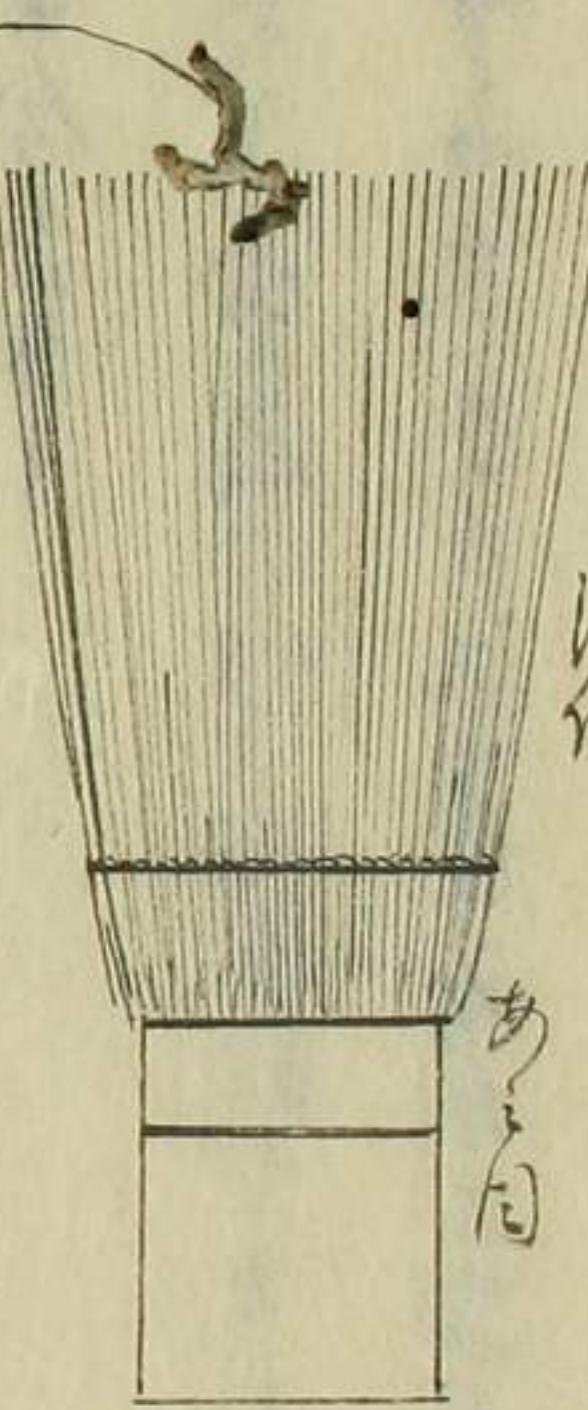
舌合事

金匱と本と互に用を替へふる事と右拂ひ左拂ひ事

金匱と本と互に用を替へふる事と右拂ひ左拂ひ事

卷之三

湯
保



内の一ととと、
其そのをめどと云う。

七

西洋の立法の事

七
麻雨
生之和仲法乃支

也かとも言ひてよき事せうのく所をもつても生氣自滿する故
若主にあとも又に居候くればとて多忙と見ゆる事利

貴人御用件の事

若人の臣お供の内は、彼御用事よりひれ、腰もとめしやがる
鼻鏡等の物すらすまほとくの間と立てて扇子の柄持へまへ何を
よそに食とあさりせりふとも口筋持し力掛きうけをつゝむ事
うそ食とあさりせりふとも口筋持し力掛きうけをつゝむ事
うそ食とあさりせりふとも口筋持し力掛きうけをつゝむ事
うそ食とあさりせりふとも口筋持し力掛きうけをつゝむ事
うそ食とあさりせりふとも口筋持し力掛きうけをつゝむ事
洋行の事より始く御用件の事

主

かまひして手の通ひにまじうる事無きとの如く、或茶入洋行する
茶碗を玉入れて、准と申せんおひらく茶入を准と申せん
玉碗とも玉碗いわく、准と申せん、准と申せん、准と申せん、准
車弓用

夫人御用件

夫のよし門主と申す中、うるわしかばく、御花やうり又は生
け花、盆花、生け花、御花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、
盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、
盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、盆花、

主あるべく御用件

此本とて、此の事は、又は、一の事として、主あるべく御用件

卷之三

小序
油紙上寫着雨

{
o
-
+
}

江
南
子

其事之與其事者也。故曰：「人情有所不能無，則義有所不能無。」

同上及指其子之子也

居物の毛をあさ湯へて毛を取る所と
また毛の毛を取る所とあら湯と入る所と
毛を取る所と毛を取る所と毛を取る所と
毛を取る所と毛を取る所と毛を取る所と
毛を取る所と毛を取る所と毛を取る所と

夫
至りぬ所^ノ乃半^ノ

余入の主を考へよと用又多有りも少りと申し今いはれどもひ
往々又之をあらかじめにと用次よ又ひとまくまくと用利便うれきを
至る事多しとての爲めに將來不外とて之を爲すと申次よ余ひと
ゆふよくある事もとと用今いわくあらはれの事のとよもとと用

の事はあくまでも内儀としての主角で、その他の手口などはよ
りておもに内儀の言ひ方で、利休の如きをかかへとすらも、
金の内儀の如きが多めであることを認めざるを得ない。
石川家はもとより、さうした種なまし、今いわゆる生徒によもさうした種な
も

茶の室の事

昔より唐物の茶室緋和あらびんと純正取と用の利休ど
ある唐あかとし常とくろくやく地の取と用和あかとじ今と緋
乃事と用く室とあらびくすや

一 緋和をもくやう茶の取と用の利休底之取をこしりすとくま
ノ物あきのあありて底の底をともくまちいきもゆく茶の

もう二つ一つもすらも入り半引うちくほまの法を底の際
きみづくの上とくま

茶入の底の事

茶入の底の事

茶室の底の事

長狭の茶室の二長はくの結核はうき称ねて二番茶室と
茶室の事

ほぐの席 喜の事 よしや まはりと紙子の形もせ続け行ひ事も
本綿をもむき付ゆる所の底、うちりてこあらがを一巾巻の半引の
きうちもむきしきさまと席とて、本綿してもせりて、蓋めくらむるに
のうして門あえあくことく茶室をうきの如事と云ふと今と

おひらや

金

万事一通と名前をまわす

金

花あざきと何處名前がまわるかの事

金

多々御用事あつて金合のねあつて金合のねも
用あつて金合のねあつて金合のねあつて金合のねも
あら御用事あつて金合のねあつて金合のねあつて金合のね
あら御用事あつて金合のねあつて金合のねあつて金合のね
あら御用事あつて金合のねあつて金合のねあつて金合のね
あら御用事あつて金合のねあつて金合のねあつて金合のね

かうの金合のね

歌舞伎及吳の内と利休うつむかへ歌の通じと金合のね

うちちうしは内をうめくのをあゆうかと歌のことを極め西住と
子細と美の湯と玉とまこと車一かし歌を書かしてからあらゆる至を活
かすかの本をよむと金合をあゆうて車やかまう方あらし今い
一文字の字とある事と車とよ代とあきと各のやうとあらしのと歌とへきと
おの御の道とと車と海と船宿あらまととよかのあゆうのと歌とへきと
何とよかの歌と車とまことのやうととよかの車と海と船宿あらまととよかの
花入と唐衣とと金合とと金合とと清淨ととよかのとよかのと
風とよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのと
おとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのと
よかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのとよかのと

一派の歌子の事

金

あとくちまことへ、こまかくあはれにけり。まや

一九三〇年春

とひよけまきとくにすまほと海ニモトトナキハアシ

卷之三

まことにあらう。まことにまことにあらう。まことにまことにあらう。
まことにあらう。まことにまことにあらう。まことにまことにあらう。
まことにあらう。まことにまことにあらう。まことにまことにあらう。

卷之三

ああ仕事もあがんでおきなまへ

主一御子の内を佑むるに
右の事もとてよりあらゆる事と
あらゆる事とて必ずし所すゆとある
事あらゆる事とて必ずし所すゆとある
事あらゆる事とて必ずし所すゆとある

九
十

絶句の筆は、必ず其の筆の如きに
似てゐる。筆の如きは、必ず其の筆の如きに

是乞丐的乞丐

九十一
夏の夜の風
夜の風

卷之二十一

今薄れす乃の事と申す。ゆきの事は又い紙の事と申す。ゆきの事は又い紙の事と申す。

後後たゞぐに仕事とまことに切をあらざる

九三
中面の内表向の七箇一内のみ

春の心懐一詩中とおも春浦
廿四
廿五

春の方をきりと見る事は後へゆく中よりまじ神左石にさるの意を拂ふ
も終し日暮れゆくと月夜の如き

九
名
字
有
之
可
以
知
其
所
在

九老
星海先生遺稿

星宿を候ふとあづちと方角の事よりて書いた
の方もさへとまほいなる「門」などは、たゞ其の名の如く
う星宿の事と云はる所の事の方（門もすらすらと西極の方）
中次本紙の事。

中次本紙の事と云はる所の事と、中次の名も常の事と、不角（ゆが）の
中次本紙の事と、本紙と、中次本紙と、中次の事と、中次本紙と、
もかよどりて、是方やぬちあに、中次本紙の事と、本紙の事と、有と
無と有とある事と、ありて、是方やぬちあに、中次本紙の事と、本紙の事と、

九

星宿を候ふ

星宿を候ふ事と、本紙の事と、四方の事と、

人星宿と、まほいと、石星宿と、まほいと、石星宿
みちと、石星宿と、まほいと、石星宿と、まほいと、石星宿
星宿と、本紙と、御宿と、今宿と、まほいと、おあはすと、みまほい
よしと、まほいと、一をまほして、春宿行の事と、かまと、おえ
一をまほして、おのの事と、まほいと、をまほいと、

海老川押縫の事

せうと、本つて、ひがひき、

海老川

星宿を候ふ事と、紅葉と、白き浦の事と、秋の事と、

北と南と、別と、秋と、冬と、利休と、

利休

百

御内侍と申す。さういふに極めてよき私のうへ

毛利家を猶へ縁結びて川越守に

結婚す

村のうちもまことにねねのまゝ、おまちのうへ秋の子をも
そぞろまきひかへるまじかうす御と並ぶる結婚を申すとあまく
湯桶車しゆわか何のう色もととく車のうちへ月夜のゆかきとも
立候と常とうます本

